

CURES

NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

1992.8.20 No.24

巻頭言

今日における金の価値尺度機能について

松本久雄

わが国におけるマルクス経済学研究者の間で、潜在的あるいは無意識的に金廃貨論が広く浸透していることは、否めない事実であろう。その背景には、1971年8月のニクソン声明以降金との固定比率での交換性を失ったドルが、為替相場が変動制に移行して後も、なお基軸通貨として機能し続けており、アメリカの銀行制度の内部における当座預金の移転によって、第三国間の国際取引が最終的に決済され、金は国際決済手段としても登場しなくなっているという現実があることは言うまでもない。そして、金廃貨論—金がもはや貨幣ではなくなっているという判断—の究極の根拠は、今日金は価値の尺度として機能していないと

いう事実認識にあり、この事実認識をもたらしている最大の要因が、兌換停止下にあっては価格の度量基準は不確定であり、金はもはや価格の度量基準としては機能していない、という見解であることも否定できない。

そこで以下では、はたして金はもはや価格の度量基準として機能しえず、したがって価値の尺度としての機能をも失っているものかどうか、を考えてみることにしたい。

たしかに世界中の商品の価格は、ドル、円、マルクのようなそれぞれの国に固有の貨幣名で表わされているから、それぞれの国の単位貨幣名がどれだけの量をあらわしているのか—その量量がその国の価格の度量基準とし

- 巻頭言松本久雄
- CURES Report
「地球サミット報告 —'92グローバル・フォーラムに参加して—」……市原あかね
- CURES Salon
「『現代北陸地域経済論』(経済学部研究叢書7)を出版して」……佐々木雅幸
- Topic
「『珠洲市日置地区の医療・福祉実態調査』について」……河野すみ子
- 地域経済文献情報

て機能すべきもの—がわからなければ、商品価格がどれだけの量を表わしているかは不明となる。諸商品の価値を一定の量に等しいものとして表現するのが金の価値尺度機能だから、その量が不明なのでは金は価値の尺度として機能しているとは言えないことになるのは明らかである。

しかしこのことは逆に言えば、単位貨幣名の表わす量が確定できるならば、今日でも金が価値の尺度として機能していると言えることになるはずである。そのことは可能だろうか。

今日でも金が貨幣商品であるとする立場からすれば、金以外の諸商品の価値は金の量で表現されており、それが商品の価格であるが、金の価値を金の量で表現することはできないから、金は価格をもたないのであり、金の「価格」とは一定の量に付された貨幣名という意味しかなく、したがって、その逆数が単位貨幣名の表わす量を意味しているはずである。たとえば、かつて存在した金1オンス=35ドルという価格は、1オンスの金が35ドルという貨幣名で呼ばれることを意味しており、したがって1ドルという単位貨幣名は1/35オンスの量を表わしている、ということなのである。

現在、世界にあるいくつかの国際金市場では、日々変動する金の価格がドル建てで表示されている。市場によって僅少な差異はあっても、このドル建ての金の市場価格は、1ドルの代表する量—日々変動する量—を表わしているのである。そして、この国際的な金市場価格は、対ドル為替相場を通じて、各国通貨建ての国内金市場価格の基準となる。それが各国の単位通貨の代表する量を表わしていることになる。もちろん、金の市場価格の運動は国際市場から国内市場へ波及する

だけでなく、各国の国内市場から国際市場へも波及する。

しかしいずれにせよ、国際市場での金の価格と各国内市場での金の価格をつなぐのは、各国通貨の対ドル為替相場である。たとえば、国際市場での金の価格が1オンス=350ドルで、円の対ドル相場が1ドル=130円であれば、日本における金の市場価格は(130円×350÷31.1035で)1グラム当り1,463円前後になる。このばあい、1ドルの表わす量は1/350オンスで1円の表わす量は1/1,463グラムとなり、1ドル=130円という為替相場は、1円の表わす量の130倍が1ドルの表わす量に等しいことを示していることになる。

したがって、各国の単位通貨の代表する量は、1ドルの代表する量の変動と、対ドル為替相場の変動とによって二重に変動するわけだが、これが各国で価格の度量基準として機能すべき量なのである。それは絶えず変動してはいるが、決して不明なわけではないのである。

しかし、この見解に対しては少くとも次の三つの疑問が提示されうるだろう。

第1は、単位通貨の代表する量が絶えず変動しているのに、それがどうして価格の度量基準たりうるのか、という疑問であり、第2は、国際市場でドル建ての価格が決定され、対ドル為替相場を通じて各国内の価格が決定されるのは、何も金だけではなく国際商品のすべてについて言えることであれば、金も国際商品の一種であるとしが言えないのではないか、という疑問であり、第3は、各国通貨の代表量がまずあって、そこから為替相場が決まるのであれば、その為替相場は金平価といえるだろうが、独立に代表量が決定されるのはドルだけで、他の通貨は対ドル為替相場を通じてはじめてその代表量が定まる

というのでは、事態が転倒しているの
いか、という疑問である。

まず第1の疑問について。これは至極当然
の疑問である。新しい価格を持った金量によ
って商品の価値が表示されるためには、一定
の時間が必要だろうが、その前にまた金の価
格が変ってしまうということでは、それが価
格の度量基準として機能するイトマがないこ
とは明らかだからである。しかしこのことは、
金の価格が価格の度量基準の所在を皆目示さ
なくなるということではない。たとえば、金
の価格変動が激しい時には、一定の期間にお
ける平均値といったようなものが、現実に価
格の度量基準として機能しうる金量を示すこ
とは、十分に可能であると思われる。これは
特に1ドルが表わす金量とアメリカでの価格
の度量基準の関係に当てはまるだろう。

ドル以外の単位通貨の代表する金量につ
いては、さらに対ドル為替相場の絶えざる変動
が問題となるが、その変動為替相場の下で、
国際取引が少しも遅滞することなく進行して
いることは、金が各国で価格の度量基準とし
て機能し続けていることの証拠と見れるので
はなからうか。

次に第2の疑問について。金が国際商品の

一つであるということは、金が貨幣でないこ
との理由には少しもならない。もし、他の国際
商品と共に金も貨幣ではないとすれば、ドル
というアメリカの貨幣名が直接に国際商品の
価値を表示していることになるが、これが観
念的度量単位説でしかないことは明らかであ
らう。

さいごに第3の疑問について。このような
転倒が世界的に始まった起源は、IMF体制
の発足時に、アメリカ以外の各国がいずれも、
1944年7月1日現在の金純分を有するドルでそ
の通貨の平価を表示したことにある。基軸通
貨ドルを介して各国通貨が金とリンクするこ
ういうこの体制が、ドルが依然として基軸通貨
として機能し続けていることから、今日の変
動相場制下にも引き継がれているものと解さ
れる。したがって、価格の度量基準としての金
の機能が、なぜ今日転倒して表われるのかと
いう問題は、なぜ旧IMF体制下で各国が直
接に金量で自国通貨の平価を表示しなかった
のか、という問題に帰着する。この問題は、
国際金本位制とは異なる国際金為替本位制の
性格に由来すると思われるが、この点の解明
は今後の研究課題の一つとなるかもしれない。

(金沢大学経済学部教授)

NEWS

イルクーツク国民経済大学学長を迎えて

金沢大学経済学研究会開催

環日本海国際学術交流協会(会長 山村勝郎金沢大学名誉教授)の招きで来日したロシア・イルクーツク国民経済大学のミハイル・ピノクーロフ学長、リュドミラ・ペトローバ助教授の2人を本学部に迎えて、金沢大学経済学研究会が6月12日開かれた。橋本哲哉経済学部長はじめ10人の本学部スタッフが参加した。イルクーツク側は、企業の民営化が立ち後れ、まだ相当独占的な経済体制が残存していること、今後2~3年にわたり改革されていかなければならないこと等、ロシアの経済・社会の現状、及び今後の見通しについて報告した。また、本学部スタッフに対し、日本の金融・財政政策に関する質問を積極的に行なった。イルクーツク国民経済大学と本学部は学術交流協定を結んでおり、教員・留学生の交換など今後も盛んに交流が行なわれる予定である。